

II. 特別講演

肝および肝疾患の血流画像と病態 ～動注CTによる解析～

金沢大学大学院
医学系研究科経血管診療学教授
松井 修

第52回新潟画像医学研究会

日時 平成17年6月18日(土)
午後2時～
会場 長岡グランドホテル 4階
「蒼柴の間」

I. 一般演題

1 MRIによる悪性腫瘍に対するスクリーニング検査の可能性

佐野 広晃・皆川 有弘・小林 恵子
石田 均・高橋 信平・池田 実徳
立川総合病院

【はじめに】

近年, diffusion weighted image (拡散強調画像)の体幹部への応用が, MRIの研究者, 技師の間で高い関心事のひとつとして, 実験, 導入が進んでいる。当院でも2004年7月ころ最初の撮影条件が入り, 実験的に撮り始めた。この撮影法の名はまだ全国的に統一されたものではなく, MRIメーカーによっても違うのだが今回は“Body Diffusion”とする。

【方法】

当院にて通常のMRI検査に追加するかたちで

撮影した。

撮影条件の詳細は当日の発表にて

- ・画像取得の基本撮像断面はAxial画像でギャップなしで。
- ・撮影時の息止めは不要。ただしなるべく動かないように。
- ・脂肪抑制法は, CHESS法より, STIR法を使う。

【結果】

提示した症例において腫瘍と思われる部位が高信号を示し, その他の組織の信号は拡散強調画像であることと適確な脂肪抑制法を使うことにより信号は極端に低くなった。それ故, 腫瘍を見つけること, そして3D表示もでき, 病変部の立体的な把握もできた。

【考察】

- ・全身のスクリーニングとしては信頼性の問題をクリアすれば有用と思われる。ただ今後多くの症例と研究が必要。
- ・腫瘍と思われるものの内部でも信号の強弱あるとき, 腫瘍の活動性, 種類なども判るかもしれない。

2 経頭蓋超音波検査(TCD)の有用性

高橋 和志・山崎まゆみ・長谷川邦雄
水落 勇人・斉木久美子・高野 義昭
朝妻 和香・大倉さとみ・川又 浩行
中川 一馬

立川メディカルセンター立川総合病院
臨床検査科

【目的】くも膜下出血後には血管の脆弱性により脳血管攣縮が問題となることが指摘されている。今回, 破裂脳動脈瘤によるくも膜下出血手術後のTCDにおいて, 血管攣縮の症例を経験したので報告する。

【測定方法】TCDにより中大脳動脈の平均血流速度を測定した(平均血流速度の120cm/sec以上の上昇で血管攣縮を疑う)。同一患者の連日測定にあたり, 検者による差を抑えるために測定するCranial-Windowはマーキングし, 検査条件(Power・SV・Depth)も可能な限り一定とし